

萩町並散歩 60景選集1 ～城下町～

- 7 平安古児玉横丁の風景(重要伝統的建造物群保存地区)－昔の『鍵手形』道路がそのまの姿で残されて珍しい。
- 8 江戸屋横丁筋風景(国指定史跡・萩城々下町)－右側は青木周弼(藩医・蘭学医)・研蔵(大典医)・その長子周蔵(外務大臣)旧宅。周蔵氏が日本最初の南米(ペルー)に移民を送られたが、この度のペルー人質事件の青木大使は周蔵氏の曾孫。明治の頃の姿がその儘活きている感じで、旅が楽しめる散歩道である。
- 9 堀内浜往還風景(重要伝統的建造物群保存地区指定)－この道に添って、かつての毛利一門、永代家老、寄組といった重臣たちの邸宅が建ち並んでいた道筋で、右側の長屋は繁沢家(1,094石)のもの、左側は永代家老益田家(12,000石)物見矢倉の一部で、これら長屋門や土塀などと一体をなし、歴史的風致を残している。
- 10 周布家長屋門のある浜往還の風景－周布家は萩藩永代家老益田家の庶流で、石見の国周布郷の地頭職として周布村に住し、周布を氏としたところから始まったもので、藩政時代は大組士の筆頭として、1,530石の知行を得ていたもの。明治維新の折、活躍された周布政之助はこの周布の分家の一人。江戸時代の武家屋敷の面影を残している。
- 14 口羽家住宅(国指定重要文化財・建造物)－口羽家は萩藩の寄組士(禄高1,018石)で、代々萩城三の丸に住んでおり、大身の武士の居住地区であった堀内地区において、現在も旧藩時代そのままの旧位置に残っている。藩の旧三の丸地区には多くの長屋や土塀は残ってはいるが、主屋

共々表門も揃って現存しているものは、この口羽家以外にはない。表門は江戸藩邸の門を拝領して萩に移築したものと伝えられているが、手法からみて、18世紀後半のものではないかと言われている。この長屋門は桁行(ケタユキ)22.2m、梁間(ハリマ)4.9m、入母屋造りの本瓦葺(ホンカワラブキ)で、表側は白壁、腰下は「なまこ壁」となっている珍しいもの。

37 萩城々下町(南古萩町、呉服町・国指定史跡)

旧萩城の外堀から外側にあたり、町筋は碁盤の目のように画され、武家屋敷や町家が軒を連ねていて、当時の面影をそのままとどめている。萩城々下町として可成り広い地域が国の史跡に指定されているが、その中の建造物の国指定をうけているのは菊屋家、それに木戸孝允旧宅の二軒。しかし、この一角には高杉晋作誕生の旧宅、青木周弼、研蔵兄弟の旧宅、志賀義雄氏の旧宅など、昔のまの姿で残されている。菊屋家は、代々萩藩の御用を勤めた町家で、江戸からの役人の客待ち家としても利用されており、建物はほぼ江戸時代前半期のものと推定されている。この邸の西側筋は土蔵がたちならんでいて、その名も菊屋横丁と呼ばれている。高杉晋作の実家は、この菊屋横丁添いにあり、その筋向いが共産党の志賀家であり、面白い組み合わせでもある。

萩町並散歩 60 景選集2 ～萩逍遙～

4 恵美須町筋の古い土壁の風景

15 平安橋(市指定有形文化財・建造物)－この橋は萩城三の丸の三ヶ所の総門(北・中・平安古)の一つである平安古(ヒヤコ)の総門前の外堀に架けられている石橋で、城下町から三の丸へ入る南の通路の一つとなっていたものである。橋の材質は玄武岩、定着桁を備えた「ゲルバー桁橋」の珍しい橋とも言われている。

16 中渡の松原風景－中渡の平安古側の河添いに松の巨木の並木があって、玉江橋からの眺めは素晴らしく、萩では一番印象深い風景である。これらの物言わぬ老松と水と土塀とが、旅をする人々の心に歴史の重みを暖かく語りかけてくれるのかも知れないのである。

江風山月書楼跡と常盤島(上部左手にコンモリと松の木が眺められる処)。常盤島対岸にある家は、かつての藩主の別邸で、一名花之江御殿と呼ばれていたもの。この花之江御殿は、三の丸にあった関係から、当時の現役の側室さんのお住いで、殿様も度々お越しになっておられたようである。現在萩城跡の本丸跡にある「花之江茶亭」は、この御殿の屋敷内にあったものを、明治7年、萩城解体後、品川弥二郎の手によって移築されたもので、花之江茶亭の名が付けられたものと言われている。ところで昔の現役の側室さんのお年は30才が定年だったという話があるから、今から思うと考えられないような話である。

17 藍場川界限(アイバガワカイワイ)・湯川家の風景－明治の頃までは大溝(オオミヅ)といわれていたが、江向の川端に藍場(アイバ)があったため、いつの間にか藍場川と呼ばれるようになった由。この川添いの周辺には川の

水を利用する生活の智恵が残されていて、その代表的建物か大組士・湯川家別邸がその一つ。

19 奇数代藩主夫妻の外、11 烈士など幕末に活躍した方々の墓があり、その一つに楯取道明の墓がある。楯取素彦氏(男爵)の次男。台湾にて戦死(年39才)、彼は現代教育のもとを作った方とされている。

東光寺総門風景－護国山東光寺は、元禄4年(1691)3代藩主・毛利吉就が、萩出身の名僧・慧極を開山として創建した全国屈指の黄檗宗(オウバクシュウ)の寺院である。この寺は一説によると、江戸徳川3代将軍家光によって創建させられたものとも言われており、既に毛利の菩提寺大照院もあるもので、3代藩主のあと、東光寺は奇数代の藩主の菩提寺となったもの。総門のほか、三門、大雄宝殿(ダイオウホウデン)、鐘楼など、夫々国指定重要文化財・建造物の指定をうけているもの。墓地の荘厳さは当時の造園技術の水準の高さを知ることができ、素晴らしく、旅情を深めてくれるようである。

23 浜崎本町筋風景－昔の繁栄当時の建物が現在29棟残っており、『しみ戸』、『大戸』、『虫籠窓』の作りの家々が眺められ、この地区では、毎年5月の中旬頃『浜崎おたから博物館』としての催しが行われていて面白い。藩政時代、浜崎の町人は三田尻(防府市)町人と並び称せられ、その経済活動は広く日本海沿岸一円におよび、魚市場と魚問屋、仲買人、東北問屋などの屋敷が、この松本川河口の浜崎にひしめいていたもの。今は北前船の運行の衰微と共に寂れ、いまは漁業のみによって支えられ、水産加工業者や船具の商店などが多く、その軒並に混って、古風な大戸や格子戸のあるたずまいをもった、藩政時代の繁栄した当時の面影を残した町家が所々に残存していて、旅情を誘って呉れる散歩道の一つである。町内には住吉神社・お船倉などがある。

「萩、町並散歩 60 景」・絵はがき(抜粋版)について

故澤本良秋が、旧萩市内の町並風景をスケッチして彩色した絵 60 枚を、「萩、町並散歩 60 景」と題して 2000 年に刊行した画文集を復刻したものです。元々の絵は F4 サイズのスケッチブックに描かれていますが、冊子では刊行された画文集を元に A4 サイズに縮小しております。この冊子から 12 枚を選び絵葉書としたものです。

絵に添えられている文を読みこなすのに骨が折れると仰る方も多いため、テキスト化してご参考までにお付けしております。原文の言葉遣いをできるだけそのまま残すようにいたしましたが、下記について一部修正を行っております。

漢字の略字は通常の字体による表記としました。

助詞や送りがなを補った個所があります。

読点の削除や追加を行った個所があります。

一部の明らかな固有名詞の誤りを正しました。

なお、元としたスケッチ画は、萩市菊ヶ浜の喫茶俗塵庵サワモト店内、菊ヶ浜のホテル「美萩」、越ヶ浜のホテル「萩小町」ギャラリーなどでご覧いただけます。